「平和賞」ユヌス氏に聞く

3/21

株主利益より社会的貢献を

「貧者の銀行」と呼ばれるバングラデシュ、グラミン銀行の創設者で、ノーベル平和賞を受賞したムハマド・ユヌス総裁(六)が本紙の単独インタビューに応じた。世界が深刻な経済危機に陥る中、低所得者向けの融資で貧困に立ち向かう同総裁に、金融のあり方を聞いた。

（聞き手・池尾伸一）

―金融危機の原因は。

「金融街の一握りの人々がどん欲になり、市場が賭博場になった。価値のない紙切れの売買で架空の経済を膨らませ城を建てたものの、土台は簡単に壊れ城は崩落した」

―経済制度自体も偏っていた。従来型の資本主義では人間は自分の利益を最大限に追求する存在で、企業も利益だけを追求するものだと考えられてきた。この風潮の中、人々のエネルギーや創造力は利益追求だけに注がれてきた。それが行き過ぎ、極端に強欲な人間を生んでしまった」

―改善策は。

「人間の中には自分の利益を追求する『利己』の本能のほかに、他人のために何かをする『無私』の本能もある。利益だけ追求するのではなく、『無私』の本能に根差して、人助けを目的とした企業も必要だ。私はそれを『社会的企業（ソーシャル・ビジネス）』と呼ぶ。株主利益の最大化を目指す企業に加え、社会的利益を目指す企業があれば、資本主義はもっと良くなる。グラミン銀行は後者の新型企業だ」

●融資は人権

―従来の銀行との違いは。

「米国の銀行の住宅ローンは住宅を持たせるためでなく利益追求が目的だったために、借り手の返済能力を超え過剰に融資した。私たちの銀行は人々を貧困から引き上げるのが目的だ。一般の銀行は担保を持つ人にしか貸さないが、私たちは融資は基本的人権と考えており、貧困層に無担保で貸す。支店や行員の評価も借り手が貧困から脱却できたかがポイントになる」

―欧米の銀行は高度な金融工学を使っても融資が焦げ付いた。グラミン銀はなぜ、無担保で98％の返済率を実現できるのか。

「借り手はお金に触れたこともない貧困女性だ。ある女性に三十ドルを貸すと手が震えだした。見たこともない大金を手にし、彼女は思った。『見ず知らずの人が私をこんなに信頼してくれる。何としても信頼を裏切らないようにしよう』と」

●借り手信頼

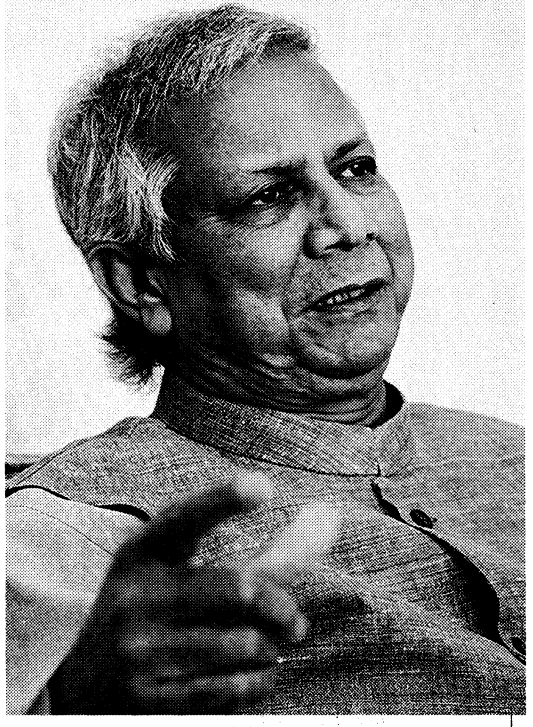
「彼女はその金でニワトリを買った。卵を売って週六十セントずつ返し、一年後に借金を完済する。自信を得た彼女は次は百ドル借りて牛を買い、牛乳販売を始めた。私たちは借り手と貸し手の信頼に基づく銀行なのだ」

―不況で日本でも失業率が上昇した。若者のひきこもりも問題になっている。

「社会的企業は日本などでも役立つ。グラミンの借り手には雇用は求めるのでなく、自分でつくるものといっている。起業を手伝う小規模金融は有効だ。また、豊かな社会で育った若者は利益だけのために働くことに興味を失っている。地球温暖化阻止や人助けのための企業は、やる気を起こさせるだろう」

―世界経済の行方は。

「不況が長引けば雇用が失われ、治安が悪化、不必要な地域紛争が起こる危険すらある。従来の経済制度が通用しないのが明確化したのだから、これは仕組みをつくり替える絶好のチャンスだ。世界の普通の人々がやる気を出す時だ」



株主至上主義経済に異を唱えるムハマド・ユヌス氏＝東京都文京区で

貧困の削減へ 無担保で融資 グラミン銀

ユヌス総裁は、バングラデシュ南東部にある港湾都市チッタゴンで生まれ、米国で経済学博士号を取得した。帰国後、チッタゴン大で経済学を教えていたが、経済理論が貧困削減に役立っていないと疑問を持ち、農村を調査。竹細工を作る女性らに材料購入費二十七ドルをポケットマネーで貸したことをきっかけに、貧困脱却に金融が役立つことを発見し、一九八三年にグラミン銀行を創設した。

融資累計は七十六億ドル（約七千二百億円）に到達。女性が借り手の九割で借り手数は七百七十万人と同国最大。二千五百拠点に二万四千人の行員が働く。借り手は地区の集会や五人からなるグループに属し、助言し合う。無担保ながら返済率は98％。寄付金は受けず融資による利益で自立しており、株式の94％は借り手が持つ。

総裁は貧困削減のための各種事業も推進。総裁提唱の理念は、慈善事業に代わる新概念として注目される。貧困削減の功によりユヌス総裁と同銀行は二〇〇六年のノーベル平和賞を受賞した。

核心